



学校だより 青い鳥

平成29年度6月号
さいたま市立上落合小学校
平成29年6月1日作成

さいたま市中央区上落合4-14-24 TEL 852-5381
http://kamiochiai-e.saitama-city.ed.jp/ E-mail:kamiochiai-e@saitama-city.ed.jp



五月の夜

校長 藤澤 太郎

いよいよ運動会の開催です。今年は、自然の教室の旅程の関係で一週間後送りになりました。連休過ぎから運動会の練習が本格化して、一日一日と演技や競技が具体的になってきて、子どもたちの熱気が校庭に響き渡りました。どの学年もよく頑張っています。当日は応援をよろしくお願いします。それにしても、晴れば夏のようなこの気候には、大人も子どもも閉口です。

昼間は暑い(真夏か!)のですが、夜はとても快適で爽やかです。五月の夜風に当たると思い出すことがあります。学生の頃、少し声楽をやっていた、ブラームスの「五月の夜」という歌を歌いました。当時はドイツ語を辞書で引いても、詩の心までたどり着かないことが多く、今になって深く反省しているわけです。詩の心を掴むことができれば、また別の歌い方があったろうということです。詩の内容は、鳥の幸せな鳴き声と孤独な自分との対比といったところです。詩の中に「ナイチンゲール(ナッハティガル)」という言葉が出てきて印象的でした。これはヨーロッパから地中海沿岸にすむ小夜啼鳥(サヨナキドリ)のことで、鳴き声が鶯に似ているのだとか、、、、さらに、この詩人(ヘルティ)が生きた1800年初頭の頃のドイツの風土なんかは、とても想像できない自分がいました。この詩やメロディがとてもセンチメンタルなもの考えるのは容易なのですが、当時は断片的な訳語とメロディの盛り上がりなどから、単純に、直感的に、しかも日本の「五月の夜」のつもりで歌っていました。今思い出すのは、歌がどうかというより、当時練習していた時の気候や自分の心もちで歌っていた自分が幼く見え、とても恥ずかしいです。また、別の考え方もあります。「五月の夜」は、ヘルティにとっての特別な夜で、自分にとっての「五月の夜」を歌ってもいいじゃないか。という、やや開き直った考え方です。

こんなことから、当時はこんな行動に出ました。実際、本場ヨーロッパの歌手がどんな考え方を持っていてどんな風に歌うのか見てみようということです。幸い、オペラの引越公演のバイトが入り、念願の、歌手の方々の立ち居振る舞いや声を生で目の当たりにすることができました。

結果は皆さんのご想像の通り。圧倒的な声の力と歌手の人間味?からくる説得力のある素晴らしい表現の前にしり込みすることしきり、知りたいと思ったこととその時に感じたことの格差大きく、「自分もあぁなりたい」と思いあこがれ、続いて、「これはいくら努力をしてもダメだろう」という諦めの気持ちになりました。「五月の夜」はどこかへ飛んでいきました。

現在は、遠く離れた異国の歴史や経済そして風土(文化)などを容易に(手軽に)知る事ができます。自分にとって当時そんな環境があったらどうだったろう?と考えました。これはとても想像ができないことです。では、当時自分が少ない資料から考えた詩の心は稚拙で、歌の表現も薄っぺらなものだったのでしょうか?(多分そうだと思います。)教育の現場でも、ICT機器の活用により、臨場感のある体験ができないことはありません。しかし、本当の本物の体験に勝るものはないのではないかと思う時もありますし、自分の想像と現実の差異に気付くという体験も、つまらないことではないとも思っています。

ところで、レコードの中の人を、生で見て聴く体験は素晴らしいものでした。ヘルマン・プライ(バリトン歌手)のフィガロはVTRの何倍も生き生きしていて、声の伸びに驚愕しましたし、ペーター・シュライアーはテノール歌手ではなく、指揮者としてヘンデルを振っていて仰天しました。現在では、聴く方に関しては、食べる方もそうですが、「美味しい物を少しで。」といったことになりつつあります。このことからすると、「若い人は弾力性と吸収力がある。」ということですね。※欲を言えば本当はブンダーリッヒが聴きたかったのですがすでにいませんでした。

六月は、まず「運動会」から、そして教科等の学習のメインを迎えます。気候の変化と暑さに負けず、各学年が充実した月になることを願っています。

学校教育目標

あかるく

なかよく

たくましく